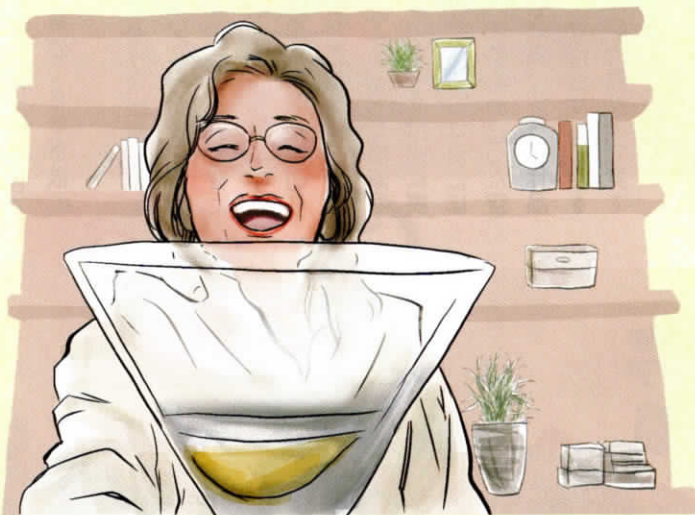


中野香織

「ファッション歳時記」

106

ズーム背景があなたを語る



インターネットを使った会話では、背景が強い印象を残す

新型コロナウイルスの第二波(で終わってほしいところですが)がまずは落ち着き、ニューノーマルこと新しい日常に入りました。コロナ前の慣習が戻ると同時に、コロナによって一気に進んだ新しい生活様式や方法も定着していくと思われまます。

その中の一つが、テレビ会議アプリ「Zoom(ズーム)」はじめインターネットを使った会議や会談です。私自身、取材も講演も打ち合わせも、ともすると社交まで、全部これで事足りることにすっきり味をしめ、わざわざ身支度を丁

寧に整えて交通機関を使って移動して人に会うということが億劫になりかけております。

ズームの普及によって、ファッションの力点も変わりました。

きちんとスーツで装いズーム会議に臨む方も、もちろんいらつしやいます。ただ、ネクタイ、ポケットチーフのフル装備でありながら、何かの用で立ち上がった拍子に、下半身のジャージが見えてしまったという方もいらつしやいました。そういう私も上半身は襟のあるシャツとスカーフで

適度の緊張感を装いながらも、下はウエストゴムのパンツだったりします。そもそも、米「ヴォーグ」編集長、アナ・ウィンターからして在宅仕事スタイルとしてスウェットパンツ姿を披露しています。それに続き、モデルやインフルエンサーが続々、自宅でのスウェットパンツ姿を会員制交流サイト(SNS)に投稿。故カールラガーフェルドは「スウェットパンツは敗北のしるしである。生活のコントロールを失ったがためにスウェットパンツなどを買うのだ」という言葉を残しておりますが、つまりコロナ禍にあつては、モード界の女帝を筆頭に私たちの多くが「敗北」してしまつたこととなります。ああなんと快い敗北。

しかし、ズーム会議も回を重ねると気付けてくるのですが、後々で記憶に残るのは、その人の装いやヘアメイクよりもむしろ、背景なのです。インテリアや片付け具合などを通して、日頃の、素の生活が丸見え。整いすぎた背景の場合でも、その人がどのように自分を見せようとしているのか、がわかる。バーチャル背景を駆使して生活感を隠すこともできますが、そのような隠蔽(いんぺい)で逆にその人自身の印象は薄まってしまう。無防備であれ作爲的であれ、ズーム背景がその人らしさを物語るのです。

素のままの生活背景を映し出すこと

にはリスクもありますが、多くの人が苦しい時代において、私たちは完璧な美に好感を持つわけでもないようです。女優のメリル・ストリープは、自粛期間、バスローブ姿のすっぴんでマティーニを飲む姿を披露しました。背景には飾り棚が見えますが、多々あるはずのオスカー像もなければアートな置物があるわけでもない。大女優にしては拍子抜けするほどの地味でスカスカの飾り棚。これが彼女の飾らない人柄を表して魅力的だと称賛を博しました。この生活背景が彼女の「素を演じる」ための計算された小道具の一つであったとしても、それはそれであつたばれです。

ズーム時代には、背景もまた、自分を語るファッションの構成要素になつたのです。スウェットパンツで楽になつた分、ちょっとは生活背景に気を遣いましょうか。



なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「「イノベーター」で読むアパレル全史」(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)ほか多数。